

只見町のユネスコエコパークの取り組み②

多雪地帯のスギ人工林の
持続可能な管理・経営のための技術開発

戦後日本では、復興と高度経済成長の過程でひっ迫した木材需給に対応するため、木材生産を増加する目的でスギなどの針葉樹の植林が政策的に進められました。その中で、只見町も集落周辺などにスギが植林されました。しかし、豪雪地帯にある只見町では、スギ林は雪の影響を受けるため管理コストがかかり、良質材の生産にも不利な条件にあります。さらに、1960年代、木材輸入が自由化され、安い外国産材が流入し、国産材の材価が下落し、国内林業は停滞します。そのため、只見町のスギ林の大部分は十分な手入れが行われず、経済的な価値の向上や地域資源の育成が困難な状況です。

こうした中で、将来を見据えた森林資源の充実と人工林の多様な機能の向上を図るために、まずは豪雪地帯に適応した人工林の育成技術と管理方法を明らかにする必要があります。

そこで、只見町は、持続可能な林業・森林管理のためのモデル林（「ただみ豪雪林業体験・観察の森」）造成事業を行っています。この「ただみ豪雪林業体験・観察の森」（以下、体験の森）は、町民の協力のもと、2016年に黒谷地区にある1.8haのスギ人工林に設定されています。

只見町ブナセンターは、体験の森において、現況把握と林況に則した管理・生産目標と育成技術を検討することを目的に、毎木調査や植生調査などを行いました。その結果、体験の森には、大きく4つの異なる様相の林（下写真）が存在し、それぞれの林でスギと広葉樹の幹材積の蓄積、スギの品等構成、広葉樹の侵入程度は異なることが分かりました。この結果から、林ごとに管理目的、生産目標を定め、目的とする林型へ誘導するための間伐などの保育作業を行うことが重要であることが考えられました。只見町内のスギ人工林が体験の森と同じような状況にあるとは限りませんが、体験の森を一つのモデルとして、持続可能な管理・経営のための技術が開発され、町内のスギ人工林の価値が向上することが期待されています。

「ただみ豪雪林業体験・観察の森」の4つの林

1 広葉樹区：スギの保育作業が行き届かず、クリやホオノキなどの広葉樹が多い区域。少数の成長の良いスギは残し、残りは除間伐を行うことで広葉樹の成長を促し、広葉樹林化を進め、将来の広葉樹用材生産林や環境林に整備する。

2 針広混交区：針葉樹と広葉樹が混交した区域。形質の悪いスギは伐採し、品質の良いスギを育成しつつ、侵入している広葉樹も活かし、針広混交林化し、針葉樹と広葉樹の用材生産を目指す。

3 針葉樹A区、4 B区：初期保育が行われた箇所では、スギ人工林が成立していて、スギの用材生産が可能。A区は60年生のスギが占め、それらは立木サイズが大きく、比較的形質も良いことから将来の大径の用材生産の可能性が高い。一方、B区は40年生のスギが占める区域で、形質は良好とは言えず、並材生産を目標とする。



詳細な内容は、只見町ブナセンターが刊行する只見町ブナセンター紀要 No.6 に掲載されています。